

# 戦争の抑止力としてのソーシャルメディアの可能性

2022年3月25日  
学長 田林 暁一

最近の大きな争いとしては湾岸戦争、アフガニスタン戦争がある。湾岸戦争は1990年8月2日にイラク軍によるクェート侵攻をきっかけに、国際連合が多国籍軍を派遣して1991年1月17日にイラクを空爆して始まった戦争である。

アフガニスタン戦争は2001年9月11日に起こった米国の悲劇に関係した戦争であり、当時のブッシュ米国大統領が「We are at war. The people who knocked these buildings down will hear from us all soon.」と言うメッセージを残して、開始した。この戦争は長期化し、20年後の2021年9月10日で漸く終結し、米国最長の戦争となった。

上記の2つの戦争と今回のウクライナ戦争は軍事的に強国が弱小国を攻撃するという形に差異はないが、一つ大きな違いがあるように思われる。それはソーシャルメディア（SNS）で、誰でも参加できる広範囲な情報発信技術を用いて社会的相互性を通じて戦争情報を拡散できるようになったことである。SNSにはブログ、Facebook、Twitter、YouTube、LINE、Instagram等があり、戦況や被害は瞬く間に世界に広がり、誰でも見るできるようになった。湾岸戦争、またアフガニスタン戦争ではジャーナリストが現地に赴き、軍や政府関係者への取材等で情報を得ていたのと比較すると、得られる情報量、信憑性、即時性等で大きく異なる。ロシアはこの情報戦を過少評価していた感があり、戦争開始後、国内での流風の抑え込みを図ったが、遅きに失した感は否めず、多くの国がウクライナに対する大規模な支援を表明しており、この動きはネット上の心理戦でウクライナが勝ったことによるとされている。情報空間と物理的な戦闘空間、そして地政学的、経済学的な空間はすべて結びついているとされており、その結果、これまでの戦争で支援をしてこなかったスイス、スウェーデン等もウクライナへの支援を表明したのは大きな事と思われる。

考え方の違いで今後も争いごとは起きる可能性はあり、その抑止力として核配備がされているが、それは大きな負の代償を伴うものであり、それに代わるものとしてより一層発達したソーシャルメディアの関与が期待される。その手段として考えられているのが、拡張現実（AR）システムで、それが現実化するとデバイスメーカーは人の目に映るものをすべて見られるようになる。つまり、目を通して世界を見ることが可能になると言われており、情報伝達の速さと正確度が増し、種々の事象を瞬時に多くの人々が知る所になる。その結果、世論の動向から、今回の様な事態発生を抑止力になる可能性があるように思われる。